

デミング賞創設60年記念

Deming Prize

60



デミング賞委員会

財団法人 日本科学技術連盟

デミング賞の60年

デミング賞創設60年史

2010

デミング賞創設のいきさつ

アメリカにおける品質管理の優れた専門家の一人であった故W.E.Deming博士（1900～1993）は、1950年6月15日、財団法人日本科学技術連盟の招きにより来日され約2ヶ月間滞在されました。

東京・神田駿河台の日本医師会館講堂で、博士による「品質の統計的管理8日間コース」のセミナーが開催され、連日博士による講義が行われました。引き続いて、箱根では「経営者のための品質管理講習会1日コース」のセミナーが行われました。これらのセミナーで、博士は、わが国産業界の経営者、管理者、技術者、研究者に統計的品質管理の基本を平易に懇切に講義され、受講者に深い感銘を与えるとともに、揺籃期にあったわが国の品質管理の成長に大きな影響を与えました。

博士の8日間コースの講義は、速記によって記録され、“Dr. Deming’s Lectures on Statistical Control of Quality”の書名で有料配付されましたが、博士は、この講義録の印税を日本科学技術連盟に寄付されました。日本科学技術連盟の故小柳賢一専務理事は博士のご厚意に感謝し、博士の友情と業績を永く記念するとともに、わが国の品質管理の一層の発展を図るために、この講義録の印税を基金としてデミング賞の創設を日本科学技術連盟の理事会に諮りました。この提案は理事会で満場一致で承認され、デミング賞の制度が創設されるところとなりました。

その後、デミング博士の著書「Some Theory of Sampling」が日本語に翻訳、出版されましたが、博士からさらにこの著書の印税の一部の寄付があり、デミング賞の基金に加えられました。こうした経緯を経て、デミング賞は大きく発展しました。現在、この賞を維持するための経費はすべて日本科学技術連盟によって負担されています。

Dr. William Edwards Deming 1900 ～ 1993

デミング博士は1900年10月14日アメリカ合衆国アイオワ州スー市（Sioux City）に生まれ、ワイオミング大学を卒業後、大学講師、米国農務省技師、連邦標準局講師、陸軍長官顧問、ニューヨーク大学教授などを歴任され、その後諸官庁、諸会社の統計コンサルタントや品質管理の指導者として活躍されました。

博士は、統計学、とくにサンプリングの理論と実際の世界的権威であり、またアメリカにおける統計的品質管理創始者の1人で、1950年以降わが国における統計的品質管理の進歩発展に多大の貢献をされ、その功績に対し、日本政府から1960年に勲2等瑞宝章が贈られました。

博士は、1993年12月20日老衰のため93歳の生涯を閉じられました。



CONTENTS

目次

デミング賞創設60年を迎えて	4
米倉 弘昌 デミング賞委員会委員長(日本経済団体連合会会長)	4
蛇川 忠輝 財団法人日本科学技術連盟 理事長	4
デミング賞60年に思う	5
本賞受賞者を代表して	
朝香 鐵一氏(東京大学名誉教授)	6
清水 祥一氏(名古屋大学名誉教授)	6
牛久保 雅美氏(サンデン株式会社 代表取締役会長)	7
坂根 正弘氏(株式会社小松製作所 取締役会長)	7
小委員会委員長メッセージ	
鷺尾 泰俊氏(デミング賞制度小委員会委員長/慶応義塾大学名誉教授)	8
米山 高範氏(デミング賞本賞小委員会委員長 /コニカミノルタホールディングス株式会社 名誉顧問)	8
飯塚 悦功氏(デミング賞実施賞小委員会委員長/東京大学特任教授)	9
〔デミング賞実施賞応募の資格/実施賞を受賞できる組織とは〕	9
〔デミング賞実施賞評価基準〕	10
祝辞	11
高木 義明氏(文部科学大臣)	12
豊田 章一郎氏(元デミング賞委員会委員長、元経団連会長)	12
喜多 恒雄氏(日本経済新聞社 代表取締役社長)	13
鈴木 和幸氏(電気通信大学教授 日本品質管理学会会長)	13
Ms. Diana Deming Cahill (日訳付)	14
中尾 眞氏(株式会社ジーシー 代表取締役社長)	15
Mr. Venu Srinivasan (TVSモーター) (日訳付)	15
Mr. Peter L. Andres (ASQ代表) (日訳付)	16
Mr. Viktor Seitschek (EOQ代表) (日訳付)	16
Mr. Kan Trakulhoon (サイアム・セメント) (日訳付)	17
Mr. Gregory H. Watson (IAQ代表) (日訳付)	17
〔デミング賞実施賞一本化について〕	18
資料・年表	19
デミング賞委員会歴代委員長一覧	20
デミング賞委員会、各賞小委員会歴代委員長一覧	21
デミング賞委員会の組織とあゆみ	23
デミング賞本賞、普及・推進功労賞(海外)、実施賞受賞者一覧	24
日本品質管理賞について、日本品質管理賞受賞組織一覧	28
デミング博士の来日とデミング賞創設の歴史	29

デミング賞創設60年を迎えて



米倉 弘昌

デミング賞委員会委員長

財団法人日本科学技術連盟会長

社団法人日本経済団体連合会会長

デミング賞創設60年を迎えて

デミング賞は、1951年に創設され、本年で60年を迎えました。

戦後の荒廃した経済状況の下で資源の乏しいわが国の企業の復興と将来を考えられた日本科学技術連盟をはじめ、学識経験者、経済界の方々、品質の重要性をいち早く見抜き、デミング博士を招聘して産業界への品質管理の普及に尽力され、その後デミング賞を創設されました。先達の熱意と多大なるご功績に改めて深い敬意を表するとともに、心より感謝を申し上げる次第でございます。

本年の受賞を含め、これまで、デミング賞本賞に73名の方々、デミング賞実施賞には220の組織が受賞の榮に浴されました。こうした受賞者並びに受賞組織の皆様方が、わが国における品質管理活動のリーダーとして、品質重視の経営に取り組んでこられたことが、今日、我が国が世界から、優れた品質と信頼性を確保した「品質立国」として評される礎となったと言っても過言ではありません。

今後もこのデミング賞が、わが国産業の品質管理活動と企業経営の発展に引き続き貢献していくことを祈念しております。ご関係各位の更なるご支援・ご協力を宜しくお願い申し上げます。



蛇川 忠暉

デミング賞委員会

総合調整小委員会委員長

財団法人日本科学技術連盟

理事長

デミング賞創設60年を迎えて

1950年6月、日本科学技術連盟が招聘し、来日されたデミング博士は、荒廃したわが国の産業界の経営者・管理者・技術者に、品質管理の重要性を説かれ、多くのコースによって懇切丁寧に指導されました。日科技連は、この博士の友情と功績を記念して、理事会の決議により、1951年にデミング賞を創設いたしました。デミング賞が創設されて以来、デミング賞委員会の事務・運営は、日科技連が司ってまいりました。この度創設60年を迎えましたことは、デミング博士は言うに及ばず、偏に産・官・学界の多くの皆様をはじめ、関係各位の長年のご協力、ご支援の賜物と心から感謝する次第です。この間、デミング賞が我が国企業の経営者・管理者に品質の重要性を喚起し、日本製品の品質の向上に多大な貢献をしてきたことは皆様ご承知のとおりかと思います。

今日、わが国を取り巻く経済、社会環境は非常に厳しく、また企業各社の「品質問題」が重要な課題となっております。今こそ品質重視の経営に取り組む時であると思います。

今やデミング賞もインド、タイ、中国等海外からの応募企業も増加し、本格的なグローバル化の時代に突入してまいりましたことから、デミング賞も多様化した企業構造への対応が求められ、更にステップアップした審査内容を構築していくことが必要であります。

私ども日科技連は、今後も企業の皆様の要求を的確に把握し、我が国企業のデミング賞応募企業の復活のために微力ながら努めてまいりたいと思いますので引き続き関係者の皆様の倍旧のご協力、ご支援をお願いいたします。

デミング賞60年に思う

デミング賞60年に思う



朝香 鐵一 氏

東京大学名誉教授

(1952年デミング賞本賞受賞)

デミング賞60年を祝して

デミング賞委員会の委員として、賞の創設以来、審査をはじめ企業の指導や教育に長年携わってきた私としては誠に感慨深いものがあります。

戦後の荒廃した我国の産業界にあって、企業経営者はもちろん、産官学の専門家と企業の職場第一線の人たちが一体となって、品質管理、TQCにひたむきに取り組んできた結果、日本の製品が高品質なブランドとして、世界のリーダーシップをとるような時代を築き上げたのではないのでしょうか。その品質向上の推進の原動力となった一つにこのデミング賞があったことは万人の認めるところであります。

デミング賞の60年を振り返れば、1950年頃から水野滋博士（1989年5月逝去）、石川馨博士（1989年4月逝去）と私の三人のトロイカ方式で日本の品質管理、TQC、デミング賞について、いつも議論し、協力して推進してきました。

お二人は、早く他界され、この60年を祝うのは私一人となってしまいましたのが誠に残念であります。

時代が移り変わり、企業環境が変化する中にあっても基本はやはり日本の本社機能が、いかに品質重視の体制を維持、向上させる能力を持ち合わせて品質中心の企業体質になっているかが重要なポイントだと思います。

今後ともさらに企業・組織の要求に合った審査をしていただき、産業界に貢献するデミング賞にしていいただければこのうえない喜びであります。

益々のデミング賞の発展を望みます。



清水 祥一 氏

名古屋大学名誉教授

(1971年デミング賞本賞受賞)

デミング賞60年に思う

まず、デミング賞60年をお祝いしたい。

日本の製造業は、戦後間もなく、米国から品質管理を学び、それを日本の国民性や企業文化に適應するように工夫し、経済発展に貢献し、世界に誇りうる品質管理に發展させた。これが、米国を含む世界の多くの国に広まり、それぞれの国で創意が加えられ、絶大な効果をもたらせた。これに貢献したのが、デミング賞である。もしデミング賞が創設されていなかったとすれば、世界の品質管理は、ここまで發展しなかったであろう。

デミング賞は、60年の間に、時代に適應するように改変が加えられ、米国、タイ、インドなどからも受賞企業が出ている。逆に日本国内からの応募が激減していることは大問題である。特に世界は激動しつつあり、国際的な企業活動が必至となりつつある。品質管理は、すでに製造業のみならず、サービス業、販売業、病院、公共事業、官公庁などでも採用されている。デミング賞も、基本を忘れず、しかも、これらの変化に適應するように、世界の人類の幸福のため、先頭を切って發展を遂げていって欲しい。



牛久保 雅美 氏

サンデン株式会社
代表取締役会長

(2007年デミング賞本賞受賞)

デミング賞創設60年おめでとうございます。

戦後65年、この間の日本の社会の変遷の中で60年の歴史を積重ねて来た事は、この賞が日本の産業界における役割として“品質の日本”の大きな基礎を築いた事であります。デミング賞委員会を中心として関係する皆様の努力に敬意を表するものです。

さて、この60年の間に品質管理の基本も“統計を主体とした品質管理から”“TQC”へ、又、更に経営を含めた“TQM”へと変わって来ました。

それでは21世紀の日本の品質管理はどうあるべきかが、課題であると思いますが、科学技術立国の日本として私はたとえば次のテーマを考えてみたかどうかと思います。

1. グローバリズムの中での日本の役割

TQG、又はTQMG (Total Quality Management of Globalism)

Globalismの中でのデミング賞のあり方

2. 環境問題の中でのTQMの役割

TQE、又はTQM-E (Total Quality Management of Ecology)

TQMと環境問題を積極的に結びつける

TQMは地道な作業の積重ねが基本ですが、これからの日本の進むべき道とあわせて夢を感じる方向ではないかと思います。



坂根 正弘 氏

株式会社小松製作所
取締役会長

(2008年デミング賞本賞受賞)

60年に及ぶデミング賞の歴史は、日本の産業復興と発展の歴史であり、当社の成長の軌跡に重なります。

当社とQCの出会い1960年代、貿易自由化による外資の日本進出が契機でした。当社の製品品質を競合他社以上にするためQCの考え方と手法を学び、経営トップから一般社員まで全員が参加して改善活動を推進した結果、製品品質が向上し市場の評価を得て、企業存亡の危機を乗り越えることが出来ました。そして、その活動が評価されてデミング賞を受賞することも出来ました。

その後もTQMを全社で推進し、事業の海外展開に伴い海外現地法人へTQMの考え方と手法を展開し今も継続しています。企業の強み弱みを明確にし、Facts Finding で現状把握できる社員を育成し企業体質を強化するためには、TQMが有効です。

一方、世界競争に打ち勝つ企業経営は、ボトムアップ型の部分最適アプローチとトップダウン型の全体最適アプローチを融合させた考え方と、それに相応しい管理手法を必要としています。デミング賞の更なる進化を期待しています。

デミング賞60年に思う



鷺尾 泰俊 氏

デミング賞委員会
制度小委員会委員長

慶応義塾大学名誉教授

(1993年デミング賞本賞受賞)

日本の製造業は1980年代に「品質No.1」の地位を獲得した。これの主要因は、TQC/TQMの実践であり、この実践・普及にデミング賞が大きな役割を果たしてきたということは、誰もが認めることであろう。しかしながら現在、デミング賞に挑戦する企業が日本では少なくなっていること、淋しく思っている。

私はここ20年インドの製造業を見ているが、インドでは、デミング賞が高く評価されており、多くの企業がデミング賞をほしがっている。まさに1960-1980年代の日本と同じである。

デミング賞の制度は、最近いろいろな改革がなされており、昔と比べるとかなり受審しやすくなっている。多くの企業がデミング賞に挑戦し、「品質No.1」の地位を確固たるものにしてほしいと思う。

数理統計学を専攻し、学生時代にサンプリング理論をデミングさんの著書で勉強した者として、デミング賞が年々発展し、「デミング」という名がずっと社会に残ってほしい、という個人的な思いもある。



米山 高範 氏

デミング賞委員会
本賞小委員会委員長

コニカミノルタホールディングス
株式会社 名誉顧問

(1994年デミング賞本賞受賞)

新たな変革への期待

1951年デミング賞が創設されて以来、60年間で73名の方がデミング賞本賞（個人賞）を受賞されています。受賞者の皆様は、日本の品質管理活動の推進、発展に貢献された方々であり、そのご指導の成果によって日本のTQM活動の基盤が構築されました。受賞者のご経歴は、大学・研究機関などの学術分野と、民間企業を主とする産業分野とに大別されますが、全受賞者が2つの分野に半数ずつ分かれる結果となっています。これは日本の品質管理活動が、産・学の協調を基軸として進められてきただけに当然の結果といえます。

さて、最近、海外の企業がデミング賞実施賞に挑戦されるなど、海外の品質管理活動が活発になっています。このような状況から、昨年、2009年度より、海外におけるQC関係者を対象とする「デミング賞普及・推進功労賞（海外）」が創設され、初めての受賞者として、IAQ会長のG. H. Watson氏が表彰されました。産業界では、各企業のTQMの推進方法に独自の手法、システムが展開される風潮もあり、デミング賞本賞小委員会としても、若い気鋭の指導者が現れるといった、新しい変革を期待したいと思っています。



飯塚 悦功 氏

デミング賞委員会
実施賞小委員会委員長

東京大学特任教授

(2006年デミング賞本賞受賞)

見識ある先人が生み、そして健全に運営してきたデミング賞は、工業製品の大衆化による高度経済成長を支える品質経営、品質技術の進展に多大な貢献をしてきました。そのデミング賞への関心が低下し、とくに国内企業の挑戦に往時の勢いが残念です。

しかし、落ち着いて考えてみれば、今年はデ賞60年にあたり、ひとつの経営モデルが60年もの間、存在感を示してきたことには改めて驚嘆します。品質中心経営の有効性には時空を超えた普遍性があるにしても、驚くばかりです。TQMは、高度成長期とは全く異なる時代にあっても、成熟経済社会における顧客価値提供の思想、方法論、システムモデル、手法、組織的推進論として実に優れた方法論であり続けています。

デミング賞実施賞小委員会は、こうした認識のもと、「デミング賞実施賞が考えるTQMモデル」と題する、経営における品質の意義、TQMの普遍性、成熟経済社会におけるTQMモデルなどからなるメッセージを、デ賞応募の「しおり」「手引き」に挟み込んで訴えてきました。デ賞60年にあたり、どのような時代においても有効な経営ツールであるTQMに対する認識の再浸透を願わずにはられません。

デミング賞実施賞 応募の資格／実施賞を受賞できる組織とは

1 応募の資格

デミング賞実施賞（以下、実施賞という）に応募できるのは、次の条件を満たす企業、機関、事業部、事業所、本部などの組織（以下、組織という）です。

- 社会的・経済的に意味のある製品・サービスを提供している、またはその提供にかかわっている。
- a) の製品・サービスに関する一貫した品質保証を行うために必要な機能の全部、またはその重要な一部（企画、設計・開発、製造、物流、営業、サービスなど）を担っている。
- b) の機能を担うのに必要な人、物、資金などの運用を行う責任と権限をもっている。

業種、規模の大小、公・私、国内・海外、組織の一部・全体は問いません。例えば、以下のような組織が該当します。

- ・ 全社、事業部
- ・ 利益を目的にしない政府、自治体、公益事業体、またはその一部
- ・ 工場、研究所、技術本部、調達本部、営業本部など
- ・ ある製品のバリューチェーン全体にかかわる一連の組織
- ・ 本社と海外法人
- ・ ある製品群を協力して提供している企業グループ

なお、上記 a) の「社会的・経済的に意味のある製品・サービス」とは、当該組織からは経営上独立した人・組織に対して提供される製品・サービスという意味です。

2 実施賞を受賞できる組織とは

TQMにより、次の3項目を実現している応募組織に授与されます。

- 経営理念、業種、業態、規模および経営環境に応じて明確な経営の意思のもとに、積極的な顧客指向の経営目標・戦略が策定されていること
 - a) の経営目標・戦略の実現に向けてTQMが適切に実施されていること
 - b) の結果として、a) の経営目標・戦略について効果をあげていること
- について審査を行い、賞を授与するかどうかを決定いたします。

デミング賞の審査は、デミング賞委員会が提示する品質管理のモデルへの適合を求めるのではなく、自ら状況認識をし、課題と目標を定め、組織をあげた改善・改革を行った結果とその過程、そして将来にわたる有効性を評価しようとするものです。審査委員は、応募組織の実状にあった課題が設定され、応募組織の実状にふさわしい取り組みがなされてきたか、その活動により、将来、より高い目的達成の可能性が期待できるかを「評価基準」に基づき審査いたします。

デミング賞実施賞評価基準

評価基準は「基本事項」と「特徴ある活動」と「首脳部の役割とその発揮」の3つから構成されます。

1 基本事項

評 価 の 項 目	配 点
1. 品質マネジメントに関する経営方針とその展開	20点
a. 業種、業態、規模および経営環境に応じた明確な経営方針のもとに、積極的な品質重視・顧客指向の経営の目標と戦略が策定されていること。	(10点)
b. 経営方針が組織的に展開され、組織一丸となって実施されていること。	(10点)
2. 新商品の開発及び／又は業務の改革	20点
a. 新商品（製品・サービス）の開発及び／又は業務の改革が積極的に行われていること。	(10点)
b. 新商品は顧客の要求を満たすものであること。業務の改革の場合は、経営の効率化に大きく貢献しているものであること。	(10点)
3. 商品品質及び業務の質の管理と改善	20点
a. 日常管理： 標準化と教育訓練により日常業務でトラブルがほとんど発生せず、各部門の主要な作業が安定して行われていること。	(10点)
b. 継続的改善： 品質その他に関する改善が計画的・継続的に行われ、市場及び／又は後のプロセスからのクレーム・不良が減少していること。あるいは市場及び／又は後のプロセスからのクレーム・不良が極めて低いレベルに保持されていること。顧客満足度が向上していること。	(10点)
4. 品質・量・納期・原価・安全・環境などの管理システムの整備	10点
上記の管理システムで、組織にとって必要なシステムが整備され、有効なものになっていること。	
5. 品質情報の収集・分析とIT（情報技術）の活用	15点
市場の品質情報、組織内の品質情報の収集が体系的に行われ、統計的方法、ITの活用とあいまって商品の開発・改善及び業務の質の管理・改善に有効に活用されていること。	
6. 人材の能力開発	15点
人材の育成・能力開発が計画的に行われており、商品の品質及び業務の質の管理と改善に役立っていること。	

2 特徴ある活動

上記「基本事項」の1～6を含めて、応募組織の発展の中核となる品質活動の中で特に力を入れ、独自の工夫を行って、成果を得ている活動のことです。この活動が少なくとも一つはあること。

3 首脳部の役割とその発揮

TOM推進における首脳部の果たす役割の重要性から、首脳部の以下の項目に関する理解、熱意、方針及びその展開、レビューの状況について評価します。

- ・TQMに対する理解と熱意
- ・トップのリーダーシップ、ビジョン、戦略方針、環境変化に対する識見
- ・組織力（コア技術、スピード、活力の維持と強化）
- ・人材の育成
- ・組織の社会的責任

祝 辞

祝 辞



高木 義明 氏

文部科学大臣

デミング賞の創設60年に当たり、お祝いの言葉を申し上げます。

戦後、我が国の急速な成長を支えたのは、世界に誇るものづくりの技術と、それによって生み出された良質かつ低廉な製品です。しかし、後に世界を席卷するメイドインジャパンの製品も、戦前においては「poor quality but cheap（質は良くないが安い）」、戦後直後は「poor quality and high（質が悪くなくて高い）」と海外から評価されており、技術の力によって良質かつ低廉な製品を供給することが戦後経済再建の中での大きな目標でした。

1951年に創設されたデミング賞は、効果的な品質管理に資する表彰制度として、日本製品の品質向上、ひいては、我が国の生産性向上や社会経済の発展に寄与してきました。少子高齢化により労働力人口が減少し、科学技術の高度化に伴うシステムが複雑化する中で、デミング賞の役割は、より一層大きくなるとともに、その期待も高まっていると思います。

創設60年を迎える本表彰制度のこれまでの功績に敬意を表するとともに、今後も、本表彰制度が更に発展することを期待しております。



豊田 章一郎 氏

トヨタ自動車株式会社名誉会長

元デミング賞委員会委員長

元社団法人経済団体連合会会長

(1980年デミング賞本賞受賞)

1900年代の半ば、「Made in Japan」は、「安かろう、悪かろう」と揶揄された時代があったことをご記憶の方も多いと思います。その後、日本のモノづくり産業は、デミング博士の教えと欧米の製品に学び、必死の思いで地道な改善を積み重ね、品質を向上させてきました。その頑張りがあったこそ、世界中のお客様に受け入れて頂けるようになったということ、我々は決して忘れてはいけません。

近年、インド・韓国・タイ・中国などのモノづくり産業は、まさに「必死・地道」に目覚ましい頑張りを発揮され、デミング賞への挑戦も盛んです。一方、我々は、成功体験に甘んじ、効率を気にするあまり、「他に謙虚に学び、自ら考え、改善していく」という日本のモノづくりのここを見失っていないでしょうか。

今こそ、モノづくり産業に携わるリーダー一人ひとりが、TQC・TQMの「原点」に立ち返った活動を積み重ねるとともに、産学で協調し、現状を打破する新しい動きを牽引していくことが必要です。そのためにも日本科学技術連盟の主導のもと、デミング賞が、企業のニーズや新しい動きを的確に捉え、世界中のお客様と社会の利益に貢献できる仕組みとして、更に発展し続けることを期待しております。



喜多 恒雄 氏

日本経済新聞社
代表取締役社長

デミング賞創設60年おめでとうございます。デミング賞は1951年の創設以来、「品質管理」の水準の向上を目指し、戦後の日本産業の復興、高度成長、そして世界に冠たる質の高いモノづくり国日本の確立に大きく貢献しました。日本産業界全体の生産性向上や競争力の強化、そして経営の高度化に果たした役割は非常に大きく、デミング賞の歴史はそのまま日本経済の発展成長の足跡といっても過言ではないでしょう。

私ども日本経済新聞社はデミング賞創設以来、日本の経済・産業の発展に微力ながら寄与したいという思いから、報道や表彰賞金の提供などを通じて、この表彰制度に協力してまいりました。また、1954年には「日経品質管理文献賞」の創設を提案させていただきました。これはデミング賞が品質管理や生産性向上に大きく貢献した企業の活動や研究を主たる対象としていることから、このデミング賞を補完しさらに学究的な基盤を強固なものとする制度が必要ではないかという発想から生まれたもので、学者や研究者・技術者の研究論文そのものを表彰しております。授賞文献は現在に至るまで200を超え、その蓄積は今後の品質管理を進めるための重要なデータベースとなっています。

世界的に経済・産業の枠組みが大きく変化する中、日本のモノづくりの再構築が改めて問われています。デミング賞の果たす役割はますます重要になるでしょう。本制度が世界的な視点で今後の日本の経済・産業界の活性化に一層の貢献を果たすことを心より期待しております。



鈴木 和幸 氏

電気通信大学教授
日本品質管理学会会長
日経品質管理文献賞
小委員会委員長

デミング賞設立60年、誠にありがとうございます。

日本的品質管理TQMの理念と体系は、デミング賞ならびに日本品質管理学会などの産学共創活動を通して、今や、欧米のみならず、新興国へと伝わり、全世界の品質レベルの向上に大きく貢献して参りました。

グローバル化がさらに進む今日、生産のみでなく市場もBRICs、VISTAなどの新興国に求めなくてはなりません。これらの国の中産階級層をターゲットとする“品質”の再定義、即ち“顧客満足”を新たに究明し、その達成への“戦略”を産学、そして官も一体となり進めていく必要があると思います。そして、新しいグローバル化の下でのTQMの理念と体系化をさらに押し進めることが肝要です。

また、デミング賞をはじめ日本的品質管理TQMが果たしてきた役割とその重要性を日本は勿論のこと、世界のより多くの国の方々に理解してもらえるように、情報の発信がさらに進み、TQMが普及・啓蒙され、全世界の“質”が向上することを期待しております。重ねて60年をお祝い申し上げます。



Diana Deming Cahill

デミング博士 息女

with my father and, with gratitude to JUSE, have the privilege that allows me to continue.

It is my fervent hope that JUSE will continue to expand its presence throughout the world, work with like-minded organizations, seek and engage qualified applicants and award the Deming Prize for many more years.

It is a great honor to be invited to contribute to The Deming Prize 60 Years' History publication. The Deming Prize meant much to my father. It was valuable to him because it carried his name but its true value represented the manifestation of his teachings to every company that sought and received the Prize from the Union of Japanese Scientists and Engineers.

My father was a pioneer in statistical quality control. In 1950, Mr. Ken-ichi Koyanagi, then Managing Director of JUSE invited him to conduct quality control lectures in Japan. The initial Deming eight-day course took place in 1950. More followed. At the lectures, he showed his flow diagram of a system. It demonstrates a method for continual learning and continual improvement. His work in Japan and the work of those that participated were the genesis of his future thinking that became his Fourteen Points and his System of Profound Knowledge. The men that attended the early series of lectures comprised 80% of the capital of Japan. My father admired and respected their dedication and willingness to learn and apply his principles. He treasured their friendship.

Since its inception, until his death in 1993, my father attended the Deming Prize ceremony every year that was possible for him to do so. For many years, I attended

要 約

この度「デミング賞60年史」に寄稿させていただくこととなり、大変光栄でございます。父、エドワード デミングにとってデミング賞は大変意味深く重要な存在でした。自らの名前を有しているだけでなく、この賞の真の価値として、デミング賞を目指す企業、そして受賞したすべての企業にデミングの教えを伝承することができるからです。

統計的品質管理の先駆者であった父は1950年日科技連の故小柳賢一専務理事のお招きを受け日本で品質管理の講義を行う運びとなりました。同年「品質の統計的管理8日間コース」を皮切りに数々のコースが開催されました。父は講義中、工程系統図 (Flow diagram of a system) を使って継続的学習と改善

の方法を教えました。日本での講義は講義受講者の方々の努力によって、後に「デミングの14原則」や「深遠なる知識」として確立され、父の思想の原点となっています。初期の講義シリーズの参加者は当時の日本資本全体の80%を占めました。講義に専念し、その技法を適用すべく意欲的に学ぶ参加者に父は感銘を受け、その姿勢に敬意を表していました。そして彼らとの友情も大切にしておりました。

第一回目のデミング賞授賞式から1993年に他界するまで、父は毎年可能な限りに出席し、その父と一緒に私も長年同席して参りました。日科技連のお陰でこの授賞式に引き続き出席させていただけることを光栄に思っております。これからも日科技連がその活動領域を世界中に広げ、同様の志を持つ組織と協力し、ますますデミング賞を盛り立てていくことを切に願っています。

デミング博士来日の記録

1950年 6月 *2ヵ月滞在
1951年 7月
1952年 1月
1954年 7月
1955年 11月
1960年 5月 *夫妻で来日
6月 *勲二等瑞宝章受賞のため来日
1965年 11月
1969年 10月
1970年 11月 *夫妻で来日
1975年 11月
1976年 10月
1978年 10月
1980年 11月
1982年 11月
1985年 11月

～デミング博士からのメッセージ～

デミング賞創設からのち、博士はその発展の時代時代に応じて、毎年のようにデミング賞授賞式に出席され、また、出席されない時も必ずメッセージを贈られました。それらのお話やメッセージの一部をご紹介します。

- 統計技術、統計学的頭脳は日本の大きな資源である (1951年)
- 1950年に始まった統計的手法の普及拡大は非常に顕著である。これは日科技連がアレンジした教育プログラムを日本産業が賢明に受け入れたためである (1953年)
- デミング賞に挑戦した全ての企業が受賞すると否とに拘わらず日本の品質と経済の進歩に貢献しました。現在、Made in Japanは品質のシンボルです (1967年)
- デミングサイクルが示すように品質は止まってはなりません。現在と将来絶え間ない改善で顧客の需要を満たさなければなりません (1970年)
- 現在の日本はドルとポンド安の障害を越えて円条件で自分たちを高く掲げ貿易しなければなりません (1972、73年)
- QCサークルは管理システム改善への素晴らしい力です (1970、72、73、75年)
- 日本産業は従来見られなかった品質と生産性を獲得し、Made in Japanは最高品質と信頼性を意味します (1980年)
- 品質は、1950年以來今日まで全員・全社的工作となり、原価低減のもとにあらゆる面でより良い品質を目指し、日本産業の業績は、全世界の経営管理における教え (Lesson in Management) を構成します (1991年)

[日科技連ニュースNo.76p5より抜粋]



中尾 眞 氏

株式会社ジーシー
代表取締役社長

(2000年デミング賞実施賞受賞会社)

(2004年日本品質管理賞受賞会社)

デミング賞創設60年、心よりお祝い申し上げます。

本賞が永きにわたって日本の品質管理、ひいては日本のモノづくりの発展に与えた影響は図り知れません。21世紀に入ったこの10年では、タイ・インドを中心とした国々の、国家を挙げての品質管理普及と人づくり、モノづくりへの熱意は、見事デミング賞獲得という形で花開いております。

一方、わが国ではバブル経済崩壊以降、次第次第に日本のモノづくりの精神と技術が忘れ去られつつあるとの危機感をもっております。

TQMのこころである、お客様第一、社員の働く満足度向上の考え方は、売上や組織の大小に拘らず、すべての地域、すべての組織においても活用できる経営ツールだと信じております。デミング賞はTQMが正しく理解され、適格に運営され効果をあげているか、また真にお客様・社員にとって満足度の向上につながっているかなど、第三者としての評価を受ける事により、自らの立ち位置を知ることとなります。これからの時代こそデミング賞の果たすべき役割は、日本のみならず、広く海外でも大きな期待が寄せられております。

“お客様満足の向上”をめざす世界中のあらゆる企業にとって、デミング賞が今にも増して産業界の指針としてますます発展することを祈念いたします。



Venu Srinivasan

Chairman
TVS Motor Company Ltd.

It is heartening to learn about JUSE celebrating 60th anniversary of Deming prize. I congratulate JUSE for facilitating 220 organizations through the journey towards excellence and challenge for Deming prize.

Five companies in TVS Group won Deming prize from 1998 starting with Sundaram Clayton. We at Sundaram Clayton and TVS Motor Company immensely got benefitted by our TQM journey especially preparing and challenging for Deming prize.

We derived several benefits such as a well articulated Mission, Values and Principles that guide our business, policy management to align entire organization for breakthrough objectives, setting up robust daily management practices, building a culture of continuous improvement through rigorous PDCA and Total Employee Involvement. Equally, the diagnosis prior to Deming examination, actual Deming examination, post Deming diagnosis and periodical audits has matured our TQM practices. This helped us to improve our competitiveness in the market place.

During my interview, post winning the Deming prize, I mentioned in an interview that Deming prize is just a ticket to board a train and the journey is going to be very long and challenging. We now realize how true this is especially in view of the fast changing business environment in India and

other global markets where we operate.

We will continue to leverage our association with JUSE towards next phase of our Journey and I wish JUSE all the very best on this great occasion of Deming Prize 60th Anniversary.

要 約

デミング賞が60年を迎え心躍っております。エクセレンスを追求し、デミング賞へ挑戦した220もの組織を支えてきた日科技連に対しお祝い申し上げます。

TVSグループからは1998年のスンダラム・クレイトンブレーキ事業部に始まり、5つの企業がデミング賞を受賞しております。賞を目指す過程でTQM推進に尽力したことは、我々スンダラム・クレイトンとTVSモーター各社に非常に大きな恩恵と効果をもたらしました。

事業と方針管理を推進する上で指針となるミッション、価値観、そして理念が明確になったことでTVSグループ全体が連携して目標へ向け躍進し、日常管理やPDCAをしっかりと行い、全員参加のもと継続的改善の文

化を作り上げるなど、数々の恩恵を受けています。同様に、TQM診断、デミング賞審査、受賞後のフォローアップ調査、定期審査などを通し当社のTQM活動は成熟度を増し、マーケットにおける競争力も高まりました。

「デミング賞はほんの始まりにすぎません。いわば列車のチケットです。その先には多大な努力を伴う長い旅路が待ち受けています」。デミング賞受賞後に受けたインタビューで私はこのように述べました。インドのビジネス環境や当社が事業を展開する世界市場がめまぐるしく変化する中、この言葉がまさに現実であると実感しています。

我々は今後も日科技連とのつながりを活かしてさらなる高みを目指して参ります。デミング賞60年という素晴らしい日をお迎えになり、ここに改めて日科技連の繁栄をお祈り致します。



Peter L. Andres

President

ASQ: American Society for Quality

We want to learn. We seek direction. For 64 years, the Union of Japanese Scientists and Engineers (JUSE) has been providing the resources for organizations to find their direction, learn, and improve. For nearly as long (for 60 of those 64 years), JUSE has administered the Deming Prize, promoting its values, assuring recognition of achievement and celebrating success. The list of recipients for the Deming Prize for Individuals and The Deming Application Award, includes a "who's who" of quality management theory and practice. I'm pleased there are a number of ASQ members on these lists. And we are proud for ASQ and JUSE will continue our productive partnership.

I have no doubt the Deming Prize's future will be amazing. With a roster of quality management leaders and highly regarded organizations, the Deming Prize is an incredible honor and wonderful recognition. Who wouldn't want to be included on a list such as this? As quality continues to reach out beyond the traditional boundaries-into every aspect of business and throughout more and more aspects of daily life-the Deming Prize gives us an indication of where quality is expanding, growing, and taking on new dimensions. The Deming Prize shows us what we should do to improve our organizations, ourselves, and our world.

Congratulations on 60 years of the Deming Prize.

要 約

我々は皆学習の場を求め、方向性を模索しています。日本科学技術連盟は創立以来64年間、学びの場を求め模索し、改善を目指す多くの組織に必要な支援を提供し続けてきました。そして60年間という日科技連の歴史とほぼ同じ年月をデミング賞の運営・表彰とその価値を広めるために注力してきました。デミング賞本賞、実施賞の受賞者には品質管理理論とその実践分野において知らない人のいない著名な人物や団体が名を連ねており、アメリカ品質協会 (ASQ) 会員も数多く受賞していることは誠に喜ばしいかぎりです。アメリカ品質協会と日科技連との間で今後も有益な関係を築いてゆくことは我々にとっ

て非常に光栄なことです。

私はデミング賞には素晴らしい未来があると確信しています。これまでに受賞された品質管理のリーダーや高い評価を受けた組織の数々を見れば、デミング賞がいかに名誉ある素晴らしい賞であるか明らかであり、誰もが手にすることを望むでしょう。品質の領域は従来の枠を超えビジネスや生活のあらゆる側面へますます広がりを見せています。これから先、品質がどのような分野で展開し新たな局面を切り開くのか。そして、組織や私たち自身、さらにこの世界をより良くしていくには何をすべきか、デミング賞が教えてくれることでしょう。デミング賞創設60年、誠にありがとうございます。



Viktor Seitschek

President

EOQ: European Organization
for Quality

A Japanese proverb says: "Tigers die and leave their skins; people die and leave their names". Dr. William Edwards Deming's name is world wide known and valued for his teachings and philosophy, for his significant contribution to Japan's later reputation for innovative high-quality products and economic power. He is regarded as having had more impact upon Japanese manufacturing and business than any other individual not of Japanese heritage.

This year marks the 60th anniversary of the Deming Prize, 60 years of immeasurable influence exerted directly or indirectly on the development of quality control/management in Japan.

As the world grows even more complex and often more cruel, and as technology increasingly provides opportunities to do greater good but, if misused, can also do greater harm, do we not increasingly need the help of the Deming philosophy - its values, its principles, its logic, its practical guidance?

Dr. Deming's work is, I believe, hugely important, literally priceless and literally timeless. It is a real source of help and hope for making a better future, materially, socially, and mentally. That was the purpose of Dr. Deming's life work. What better purpose could there be?

I will close my brief thoughts about Dr. Deming and the Japanese prize wearing his honourable name, by inviting you to reflect on a proverb:

"Life is divided into three terms - that which was, which is, and which will be. Let us learn from the past to profit by the present and from the present to live better in the future".

要 約

日本の諺に「虎は死して皮を留め、人は死して名を残す」とあります。W. エドワーズ デミング博士の名は、革新的な高品質製品を作り出し、高い経済力を誇るまでになった日本の発展にも大きく貢献したことから、世界中で広く知られ、博士の教えや理念は高く評価されています。日本人以外では日本の製造業とビジネスに最も大きな影響を与えた人物とみなされています。

今年、デミング賞は創設60年を迎えました。日本の品質管理の発展に直接的にも間接的にも計り知れないほどの影響を与え続けた60年間でした。

世界がますます複雑化し厳しい状況になりつつあります。技術の発達により大きな価値をもたらす半面、ひとたび誤ればさらに大きな犠牲を生むこと

にもなるのです。そのような環境下で私たちに必要なのは、デミング博士の哲学、価値観や理念、論理そして実用的なガイダンスではないでしょうか。博士の教えは極めて重要であり、実に何物にも代えがたい不朽の価値があります。そして物理的にも、社会的にも、精神的な面においても、より明るい未来を築く上での拠り所となり希望の源なのです。このことこそが博士の生涯を通じての活動の目的であり、これ以上の目的は存在しないといっても過言ではありません。

最後にこの格言をご紹介します締めくくりたいと思います。「人生は、過去、現在、未来の3つの期間に分けることができます。現在の恩恵を受けるために過去から学び、未来をより良く生きるために現在から学んでいきましょう」



Kan Trakulhoon

President & CEO
The Siam Cement
Public Company Limited

The Deming Prize moving into its 60th years signifies another milestone of the world class system for Total Quality Management.

We contend that, with TQM as platform, the Deming Prize takes major role to verify the adherence to quality improvements.

After 7 companies of Siam Cement Group (SCG) won Deming Prizes when SCG has practiced TQM across the whole organization since the year 1992, we at SCG came to conclusion that the Deming Prize is not an ordinary quality certificate we need to acquire for surplus customers' credit or for marketing advantage. The Deming Prize has far greater value of being an earnest mechanism to formulate an innate discipline within each individual to seek better ways to continuously improve the quality of work to achieve better results. Hitherto, SCG has been prospered with the increasing work force which diligently and relentlessly strives for better quality in all our business endeavors. The increasing high valued added products and services, and cost efficiency are all the output of TQM implementations.

Being committed to the lifelong learning along with high moral and ethical standards, SCG fully believes that together and with humility, we can make a difference in the quality of life for everyone. With the same philosophy, all of us at SCG shall walk the quality path of the Deming Prize with total respect and gratitude.

要約

デミング賞創設60年は、世界最高水準であるTQMシステムの歴史における記念すべき出来事です。

TQMを土台として品質改善活動を見極める上で、デミング賞は重要な役割を担っています。

サイアムセメントグループ (SCG) では1992年から組織全体でTQMを導入し、7社がデミング賞を受賞しました。受賞を経て実感したのは、この賞が顧客の信頼を高め市場優位性を得るための単なる品質賞ではなく、はるかに大きな影響力を持っているということです。デミング賞は、より高い成果

を挙げるため業務の質改善を継続的に追求する姿勢を個々人の中に形成する真の機能を持っています。優れた品質を実現するために尽力する勤勉な人員が増えたおかげで、SCGは全事業において発展を遂げてきました。高付加価値製品およびサービス、そして費用効率化などは全てTQMを導入した成果と言えます。

私たちSCGは生涯を通して高いモラルと倫理を持ち、たゆまずに学んでゆく所存です。そして皆が謙虚に取り組むことで一人一人の生活の質を向上していくことができると強く信じております。この理念をもとに、SCG一同は心からの敬意と感謝を込めて今後もデミング賞の品質道を歩み続けます。



Gregory H. Watson

Acting Chairman and
President of IAQ

(2009年デミング賞普及・推進功労賞(海外)受賞)

It is with deep respect for our quality colleagues in Japan that the members of the International Academy for Quality wish to collectively congratulate the leadership and membership of the Union of Japanese Scientists and Engineers (JUSE) for the achievement of the milestone of the 60th Anniversary of the W. Edwards Deming Prize. We are most confident that Dr. Deming would be impressed by your 'constancy of purpose' in the pursuit of your objective for promotion of quality in Japan and the world through this recognition.

During its sixty year history, the Deming Prize has become the most-recognized and highly esteemed international quality prize. Recognition that is accorded to organizations and individuals who are presented the Deming Prize is not easily obtained, but it is the result of their sincere dedication to the pursuit of quality and development of both innovative and rigorous quality methods.

On this auspicious occasion of celebrating the 60th anniversary of the initial presentation of the Deming Prize, I wish all the leaders of JUSE, as well as all of those who have been involved in all capacities throughout this extraordinary history of the Deming Prize, continued dedication to their commitment to the cause of quality and sustained success in the results that are achieved as a result of their dedication. May we continue together to pursue a vision of quality deployed to all geographic areas of our World and influencing every endeavor of mankind. Congratulations, once again!

要約

この度はデミング賞創設60年おめでとうございます。60年という節目の年を迎え、これまでに日本科学技術連盟が発揮したリーダーシップと果たしてきた役割に対し、品質のフィールドで共に活動する仲間として国際品質アカデミー (IAQ) 一同より心からの敬意を表すとともにお祝い申し上げます。この賞を通じ、日本でそして世界で品質を促進させるために注力するなかで日科技連が維持してきた「不変の目的意識」にはデミング博士もおよろびのことでしょう。

この60年という歴史の中で、デミング賞は世界で最も認知され、非常に名

誉な品質賞の地位に昇りつめました。デミング賞受賞は簡単に成しとげられるものではありません。品質を追求し、革新的かつ厳格に品質システムや手法を確立するために尽力した組織や個人にこそ、その功績として与えられるものです。

デミング賞創設60年という偉業に関わった日科技連のリーダーの皆様、この歴史をあらゆる立場で支えた皆様の品質理念に対するこれまでの献身と貢献を称え、引き続き皆様が末永くご活躍されますよう祈念いたします。今後ともに、世界の隅々まで品質の考え方を普及展開し、人々のあらゆる取り組みに影響を与えていくではありませんか。

改めまして、この度は誠にありがとうございます。

デミング賞が受けやすくなりました

— 事業所表彰の実施賞への一本化と応募資格の柔軟化 —

2010 年度より、デミング賞事業所表彰が統合され、実施賞に一本化されました。これにともない、実施賞の応募の資格を柔軟化し、より多くの組織にデミング賞に挑戦いただけるようになりました。

デミング賞の中でも、“実施賞”は、とくに組織に与えられる賞で、その時々を経営環境に応じた、時代が要求する新たな品質管理・品質経営を模索し、自らの組織にとって効果的な方法を開発して、それを仕組みとして構築し、実践するための絶好の機会として挑戦いただいております。

実施賞への応募資格は次のように変更になりました。

従 来

デミング賞実施賞（以下、実施賞という）に応募できるのは、自律的な経営を行っている企業または企業の事業部です。業種、規模の大小、公・私、国内・海外は問いません。ここでいう自律的な経営とは、次の条件を満たすことをいいます。

- a) 独自で自主的な経営ができる程度に、人、物、資金の運用を自由に行う責任と権限をもっていること。
- b) 一貫した品質保証を行う責任と権限をもっていること。
- c) 利益責任および将来の経営の発展を図る責任と権限をもっていること。

変更後

デミング賞実施賞（以下、実施賞という）に応募できるのは、次の条件を満たす企業、機関、事業部、事業所、本部などの組織（以下、組織という）です。

- a) 社会的・経済的に意味のある製品・サービスを提供している、またはその提供にかかわっている。
- b) a)の製品・サービスに関する一貫した品質保証を行うために必要な機能の全部、またはその重要な一部（企画、設計・開発、製造、物流、営業、サービスなど）を担っている。
- c) b)の機能を担うのに必要な人、物、資金などの運用を行う責任と権限をもっている。

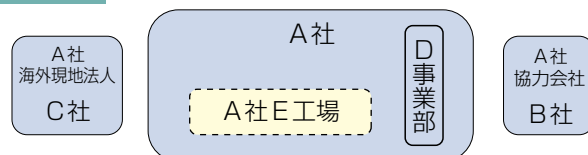
業種、規模の大小、公・私、国内・海外、組織の一部・全体は問いません。例えば、以下のような組織が該当します。

- ・ 全社、事業部
- ・ 利益を目的にしない政府、自治体、公益事業体、またはその一部
- ・ 工場、研究所、技術本部、調達本部、営業本部など
- ・ ある製品のバリューチェーン全体にかかわる一連の組織
- ・ 本社と海外法人
- ・ ある製品群を協力して提供している企業グループ

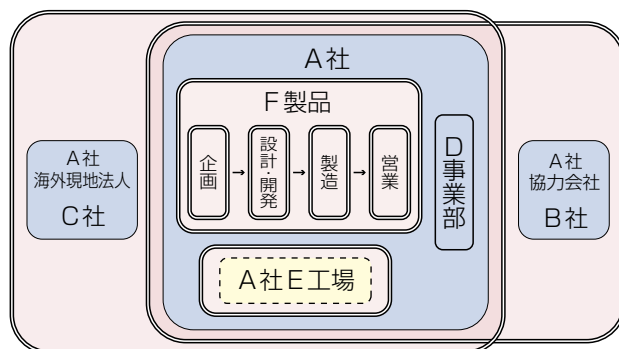
なお、上記a)の「社会的・経済的に意味のある製品・サービス」とは、当該組織からは経営上独立した人・組織に対して提供される製品・サービスという意味です。

例

現 行



変更後



- 新たに応募可能となった範囲
- これまでの実施賞
- これまでの事業所表彰

この変更にともない、過去に事業所表彰を受けた組織も、日本品質管理賞に応募できるようになりました。

お問合せ先：デミング賞委員会事務局 TEL：03-5378-1212 E-mail：demingprize@juse.or.jp

資料・年表

デミング賞委員会歴代委員長一覧



石川 一郎 氏
(1951年6月～1962年)



久留島 秀三郎 氏
(1963年～1970年9月)



植村 甲午郎 氏
(1970年10月～1977年12月)



土光 敏夫 氏
(1977年12月～1982年3月)



稲山 嘉寛 氏
(1982年10月～1987年10月)



斉藤 英四郎 氏
(1988年1月～1991年2月)



平岩 外四 氏
(1991年2月～1994年7月)



豊田 章一郎 氏
(1994年7月～1998年7月)



今井 敬 氏
(1998年7月～2002年5月)



奥田 碩 氏
(2002年5月～2006年5月)



御手洗 富士夫 氏
(2006年5月～2010年5月)



米倉 弘昌 氏
(2010年5月～現在)

(デミング賞委員会の歴代委員長は、社団法人経済団体連合会の会長に初代から現在の第12代米倉会長までご就任いただいております。)

デミング賞委員会、各賞小委員会歴代委員長一覧

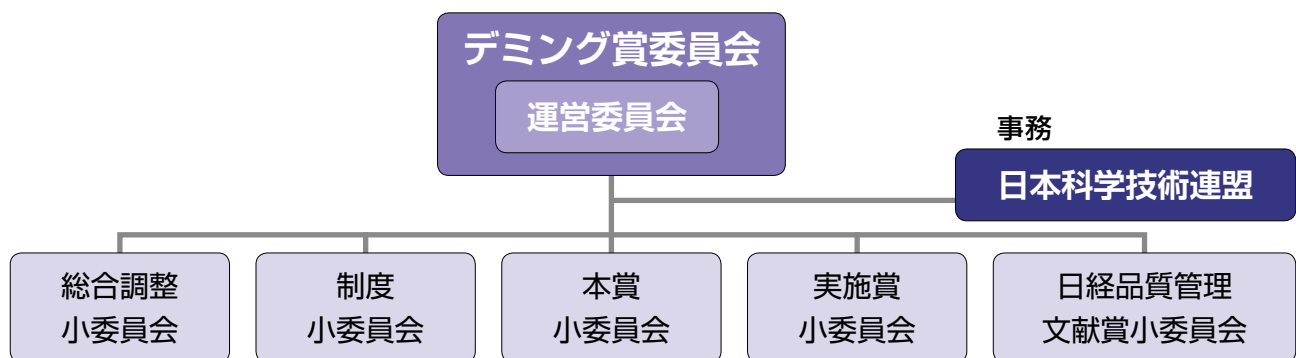
／は年度途中で交代
(敬称略、五十音順)

年	委員長	幹事長							
1951	石川 一郎	後藤 正夫							
1952	石川 一郎	後藤 正夫							
年	委員長	幹事委員会	同左副委員長	審査要項等の規定改正小委員会	デ賞小委員会				
1953	石川 一郎	駒形 作次	水野 滋	湯川 正夫	山内 二郎				
年	委員長		品質管理文献賞創設の規定作成小委員会	規定・募集要項・申請文書書式・審査要項等の検討・審議のための小委員会	デ賞審査小委員会	デ賞実施賞審査小委員会	同左副委員長	日経品質管理文献賞小委員会	セクレタリー
1954	石川 一郎		美濃部亮吉	西村 啓造	西村 啓造	勝田雄次郎	－	美濃部亮吉	小柳 賢一
1955	石川 一郎			審査規定小委員会 美濃部亮吉	植村甲午郎	勝田雄次郎	水野 滋	鈴江 康平	小柳 賢一
1956	石川 一郎			規定小委員会 美濃部亮吉	植村甲午郎	黒川 真武	水野 滋	鈴江 康平	小柳 賢一
1957	石川 一郎			規定小委員会 美濃部亮吉	植村甲午郎	黒川 真武	水野 滋	鈴江 康平	小柳 賢一
1958	石川 一郎			規定小委員会 美濃部亮吉	植村甲午郎	黒川 真武	－	鈴江 康平	小柳 賢一
1959	石川 一郎		運営小委員会	水野 滋	植村甲午郎	黒川 真武	－	鈴江 康平	小柳 賢一
1960	石川 一郎		運営小委員会	水野 滋	植村甲午郎	黒川 真武	－	鈴江 康平	小柳 賢一
年	委員長	副委員長	総合調整小委員会	制度小委員会	本賞小委員会	実施賞小委員会	同左副委員長	日経品質管理文献賞小委員会	セクレタリー
1961	石川 一郎	久留島秀三郎	久留島秀三郎	後藤 正夫	植村甲午郎	勝田雄次郎		鈴江 康平	小柳 賢一
1962	石川 一郎	久留島秀三郎	勝田雄次郎	後藤 正夫	植村甲午郎	藤崎 辰夫	石川 水野 馨滋	鈴江 康平	小柳 賢一
1963	久留島秀三郎		勝田雄次郎	後藤 正夫	植村甲午郎	藤崎 辰夫	石川 水野 馨滋	鈴江 康平	小柳 賢一
1964	久留島秀三郎		勝田雄次郎	後藤 正夫	植村甲午郎	馬場 有政	石川 水野 馨滋	久田 太郎	小柳 賢一
1965	久留島秀三郎		勝田雄次郎	後藤 正夫	植村甲午郎	馬場 有政	石川 水野 馨滋	井上啓次郎	高松 武彦
1966	久留島秀三郎		勝田雄次郎	後藤 正夫	植村甲午郎	馬場 有政	石川 水野 馨滋	井上啓次郎	高松 武彦
1967	久留島秀三郎		勝田雄次郎	後藤 正夫	植村甲午郎	馬場 有政	石川 水野 馨滋	井上啓次郎	高松 武彦
1968	久留島秀三郎		勝田雄次郎	後藤 正夫	植村甲午郎	朝永 良夫	石川 水野 馨滋	井上啓次郎	高松 武彦
1969	久留島秀三郎		鈴江 康平	後藤 正夫	植村甲午郎	朝永 良夫	石川 水野 馨滋	藤波 恒雄	高松 武彦 ／西原 哲郎
1970	久留島秀三郎 ／植村甲午郎		鈴江 康平	後藤 正夫	植村甲午郎	朝永 良夫	石川 水野 馨滋	藤波 恒雄	西原 哲郎
1971	植村甲午郎		鈴江 康平	後藤 正夫	今里 廣記	太田 暢人	石川 水野 馨滋	藤波 恒雄	西原 哲郎
1972	植村甲午郎		鈴江 康平	後藤 正夫	今里 廣記	太田 暢人	石川 水野 馨滋	梅沢 邦臣	西原 哲郎
1973	植村甲午郎		鈴江 康平	後藤 正夫	今里 廣記	松本 敬信	石川 水野 馨滋	武安 義光	西原 哲郎 ／前田 陽吉
1974	植村甲午郎		鈴江 康平	後藤 正夫	今里 廣記	松本 敬信	石川 水野 馨滋	武安 義光	前田 陽吉
1975	植村甲午郎		鈴江 康平	後藤 正夫	今里 廣記	松本 敬信	石川 水野 馨滋	木下 亨	前田 陽吉
1976	植村甲午郎		鈴江 康平	後藤 正夫	今里 廣記	松本 敬信 ／窪田 雅男	石川 水野 馨滋	木下 亨	前田 陽吉
1977	植村甲午郎 ／土光 敏夫		鈴江 康平	後藤 正夫	今里 廣記	窪田 雅男	石川 水野 馨滋	朝香 鐵一	前田 陽吉
1978	土光 敏夫		鈴江 康平	後藤 正夫	今里 廣記	窪田 雅男 ／石坂 誠一	石川 水野 馨滋	朝香 鐵一	前田 陽吉
1979	土光 敏夫		鈴江 康平	後藤 正夫	今里 廣記	石坂 誠一	石川 水野 馨滋	木暮 正夫	前田 陽吉
1980	土光 敏夫		鈴江 康平	後藤 正夫	今里 廣記	石坂 誠一	石川 水野 馨滋	木暮 正夫	前田 陽吉
1981	土光 敏夫		鈴江 康平	後藤 正夫	今里 廣記	石坂 誠一	朝香 鐵一 石川 馨	草場 郁郎	前田 陽吉
1982	土光 敏夫 ／稲山 嘉寛		鈴江 康平	後藤 正夫	今里 廣記	石坂 誠一	朝香 鐵一 石川 馨	草場 郁郎	前田 陽吉

資料・年表

年	委員長	副委員長	総合調整 小委員会	制度 小委員会	本賞 小委員会	実施賞 小委員会	同左副委員長	日経品質管理 文献賞 小委員会	セクレタリー
1983	稲山 嘉寛		鈴江 康平	後藤 正夫	豊田章一郎	石坂 誠一 ／川田 裕郎	朝香 鐵一 石川 馨	奥野 忠一	前田 陽吉
1984	稲山 嘉寛		鈴江 康平	後藤 正夫	豊田章一郎	川田 裕郎 ／等々力 達	朝香 鐵一 石川 馨 草場 郁郎	奥野 忠一	前田 陽吉
1985	稲山 嘉寛		鈴江 康平	後藤 正夫	豊田章一郎	等々力 達	石川 馨 草場 郁郎	今泉 益正	前田 陽吉
1986	稲山 嘉寛		鈴江 康平	後藤 正夫	豊田章一郎	等々力 達	草場 郁郎 近藤 良夫	今泉 益正	前田 陽吉
1987	稲山 嘉寛		鈴江 康平	後藤 正夫	豊田章一郎	飯塚 幸三	草場 郁郎 近藤 良夫	池澤 辰夫	前田 陽吉
1988	斎藤英四郎		鈴江 康平	後藤 正夫	豊田章一郎	飯塚 幸三	草場 郁郎 近藤 良夫	池澤 辰夫	前田 陽吉
1989	斎藤英四郎		鈴江 康平	後藤 正夫	豊田章一郎	飯塚 幸三 ／杉浦 賢	草場 郁郎 近藤 良夫	真壁 肇	前田 陽吉
1990	斎藤英四郎		鈴江 康平	後藤 正夫	豊田章一郎	杉浦 賢	真壁 肇 清水 祥一 近藤 良夫	真壁 肇	前田 陽吉
1991	斎藤英四郎 ／平岩 外四		鈴江 康平	後藤 正夫	豊田章一郎	杉浦 賢 ／石原 舜三	清水 祥一 近藤 良夫 真壁 肇	赤尾 洋二	野口 順路
1992	平岩 外四		鈴江 康平	後藤 正夫	豊田章一郎	石原 舜三	近藤 良夫 真壁 肇 清水 祥一	赤尾 洋二	野口 順路
1993	平岩 外四		鈴江 康平 ／前田 陽吉	後藤 正夫	豊田章一郎	石原 舜三 ／柏木 寛	真壁 肇 清水 祥一 近藤 良夫	近藤 良夫	野口 順路
1994	平岩 外四 ／豊田章一郎		前田 陽吉	後藤 正夫	豊田章一郎 ／伊藤 清	柏木 寛 ／平石 次郎	清水 祥一 近藤 良夫 真壁 肇	近藤 良夫	野口 順路
1995	豊田章一郎		前田 陽吉 ／橋林 愛朗	後藤 正夫	伊藤 清	平石 次郎	池澤 辰夫 真壁 肇 清水 祥一	久米 均	代理：仲谷 昌敏
1996	豊田章一郎		橋林 愛朗	後藤 正夫	伊藤 清	平石 次郎 ／佐藤 壮郎	真壁 肇 清水 祥一 池澤 辰夫	久米 均	福田 正文
1997	豊田章一郎		橋林 愛朗	後藤 正夫	伊藤 清	佐藤 壮郎	赤尾 洋二 池澤 辰夫 納谷 嘉信	鷺尾 泰俊	福田 正文
1998	豊田章一郎 ／今井 敬		橋林 愛朗 ／井田 勝久	後藤 正夫	伊藤 清	佐藤 壮郎	池澤 辰夫 久米 均 赤尾 洋二	鷺尾 泰俊	福田 正文
1999	今井 敬		井田 勝久	清水 祥一	伊藤 清	佐藤 壮郎 ／梶村 皓二	久米 均 細谷 克也 狩野 紀昭	吉澤 正	福田 正文
2000	今井 敬		井田 勝久	清水 祥一	米山 高範	梶村 皓二	細谷 克也 狩野 紀昭 久米 均	吉澤 正	福田 正文
2001	今井 敬		井田 勝久	清水 祥一	米山 高範	代理：久米 均	狩野 紀昭 久米 均 細谷 克也	狩野 紀昭	福田 正文 ／三田 征史
2002	今井 敬 ／奥田 碩		井田 勝久	清水 祥一	米山 高範	久米 均	—	狩野 紀昭	三田 征史
2003	奥田 碩		井田 勝久	鷺尾 泰俊	米山 高範	久米 均	—	飯塚 悦功	三田 征史
2004	奥田 碩		井田 勝久 ／米山 高範	鷺尾 泰俊	米山 高範	狩野 紀昭	細谷 克也 長田 洋	飯塚 悦功	三田 征史
2005	奥田 碩		米山 高範	鷺尾 泰俊	米山 高範	狩野 紀昭	細谷 克也 長田 洋	飯塚 悦功	三田 征史
2006	奥田 碩 ／御手洗富士夫		高橋 朗 ／浜中 順一	鷺尾 泰俊	米山 高範	狩野 紀昭	飯塚 悦功 岩崎日出男 長田 洋	圓川 隆夫	三田 征史
年	委員長	運営委員会 委員長代行	総合調整 小委員会	制度 小委員会	本賞 小委員会	実施賞 小委員会	同左副委員長	日経品質管理 文献賞 小委員会	セクレタリー
2007	御手洗富士夫	坂根 正弘	浜中 順一	鷺尾 泰俊	米山 高範	狩野 紀昭	飯塚 悦功 岩崎日出男 長田 洋	圓川 隆夫	三田 征史
2008	御手洗富士夫	坂根 正弘	浜中 順一	鷺尾 泰俊	米山 高範	飯塚 悦功	岩崎日出男 長田 洋	圓川 隆夫	三田 征史
2009	御手洗富士夫	坂根 正弘	浜中 順一 ／蛇川 忠暉	鷺尾 泰俊	米山 高範	飯塚 悦功	岩崎日出男 長田 洋	鈴木 和幸	三田 征史
2010	御手洗富士夫 ／米倉 弘昌	坂根 正弘	蛇川 忠暉	鷺尾 泰俊	米山 高範	飯塚 悦功	岩崎日出男 長田 洋 中條 武志	鈴木 和幸	三田 征史

デミング賞委員会の組織とあゆみ



- | | |
|------|---|
| 1951 | デミング賞委員会発足
Dr.W.E.Demingを名誉委員長に推戴
初代委員長に石川一郎氏就任 |
| 1951 | デミング賞（本賞）、デミング賞実施賞創設 |
| 1954 | 日経品質管理文献賞創設（選考をデミング賞委員会に委託） |
| 1957 | デミング賞実施賞に「中小企業賞」創設 |
| 1963 | 第二代委員長に久留島秀三郎氏就任 |
| 1965 | デミング賞実施賞に「事業部賞」創設 |
| 1970 | 日本品質管理賞創設（世界で最初の品質管理国際会議を記念して）
1970 第三代委員長に植村甲午郎氏就任 |
| 1972 | 「デミング賞事業所表彰」創設
1977 第四代委員長に土光敏夫氏就任
1982 第五代委員長に稲山嘉寛氏就任 |
| 1984 | 「デミング賞実施賞およびデミング賞事業所表彰の運営に関する規定」を制定、
デミング賞実施賞への海外企業からの応募を認める（翌年から実施）
1988 第六代委員長に斉藤英四郎氏就任 |
| 1989 | 海外企業として初めて、米国フロリダ電力株式会社が実施賞受賞
1991 第七代委員長に平岩外四氏就任
1994 第八代委員長に豊田章一郎氏就任 |
| 1994 | 日本品質管理賞への海外企業からの応募を認める（翌年から実施） |
| 1995 | デミング賞実施賞中小企業賞、同事業部賞という名称を廃止、「実施賞」に一本化 |
| 1995 | デミング賞委員会に「参与」制度を導入 |
| 1996 | デミング賞事業所表彰への海外企業からの応募を認める（翌年から実施） |
| 1997 | 海外企業として初めて、台湾フィリップス株式会社が日本品質管理賞受賞
1998 第九代委員長に今井敬氏就任 |
| 1999 | 規定中の文言「全社品質管理（TQC）」を「総合品質管理（TQM）」に改訂 |
| 1999 | 日本品質管理賞への応募資格をデミング賞実施賞ならびに日本品質管理賞を受賞してから「5年以上」を「3年以上」に改訂（翌年から実施） |
| 2000 | デミング賞創設50年
2002 第十代委員長に奥田碩氏就任
2006 第十一代委員長に御手洗富士夫氏就任 |
| 2007 | デミング賞委員会運営委員会を設置 |
| 2010 | デミング賞創設60年
デミング賞事業所表彰を「実施賞」に一本化、実施賞の応募資格を改訂
2010 第十二代委員長に米倉弘昌氏就任 |

資料・年表

デミング賞本賞、普及・推進功労賞(海外)、実施賞受賞者一覧

デミング賞本賞

(敬称略、五十音順)

年次	受賞者名	年次	受賞者名
1951	増山元三郎 (2005年7月逝去)	1973	大場興一 (1990年6月逝去)
1952	水野滋博士を中心とする品質管理推進グループ	1974	小林宏治 (1996年11月逝去)
	朝香鐵一 (1989年4月逝去)	1975	山本太郎次 大前義次
	木暮正夫 (2000年2月逝去)	1976	石原勝吉 (1994年4月逝去)
	後藤正夫 (2000年1月逝去)	1977	布留川靖 (1995年3月逝去)
	東秀彦 三浦新 (1996年8月逝去)	1978	赤尾洋二
	水野滋 (1989年5月逝去)	1979	眞壁肇
	渡辺英造 (2003年11月逝去)	1980	豊田章一郎
		1981	唐津一
1953	北川敏男 (1993年3月逝去)	1982	塩見弘
1954	西堀榮三郎 (1989年4月逝去)	1983	豊田稔 (1992年12月逝去)
1955	森口繁一 (2002年10月逝去)	1984	池澤辰夫
1956	石田保士 (1975年7月逝去)	1985	納谷嘉信 (2009年5月逝去)
1957	山内二郎 (1984年3月逝去)	1986	河合良一 (2008年11月逝去)
1958	茅野健 (1998年1月逝去)	1987	小林龍一
1959	小柳賢一 (1965年1月逝去)	1988	竹中錬一 (1996年12月逝去)
1960	田口玄一	1989	久米均
1961	加藤威夫 (1981年11月逝去)	1990	小林庄一郎
1962	草場郁郎	1991	鐵健司
1963	山口襄 (2002年9月逝去)	1992	根本正夫 (2002年3月逝去)
1964	清水定吉 (1969年12月逝去)	1993	鷺尾泰俊
1965	今泉益正 (1996年1月逝去)	1994	米山高範
1966	関西品質管理推進グループ	1995	菅野文友
	朝尾正 門川清美 (1993年4月逝去)	1996	笹岡健三
	関和文 (1972年12月逝去)	1997	狩野紀昭
	藤田董 (2008年2月逝去)	1998	細谷克也
1967	近藤次郎	1999	小林陽太郎
1968	外島忍 (1987年8月逝去)	2000	前田又兵衛
1969	奥野忠一 (2002年12月逝去)	2001	藤田史郎
1970	杉本辰夫 (2007年9月逝去)	2002	司馬正次
1971	近藤良夫博士を中心とする品質管理推進グループ	2003	吉澤正
	安藤貞一 (2003年7月逝去)	2004	高橋朗 (2006年8月逝去)
	近藤良夫 清水祥一	2005	佐々木元
1972	伊藤鉦太郎 (1988年12月逝去)	2006	飯塚悦功
		2007	牛久保雅美
		2008	坂根正弘
		2009	長田洋
		2010	圓川隆夫

デミング賞普及・推進功労賞(海外)

本賞73名

年次	受賞者名
2009	グレゴリー H・ワトソン

普及・推進功労賞(海外) 1名

デミング賞実施賞

(実施賞、中小企業賞、事業部賞、事業所表彰順、組織名五十音順)

年次	受賞組織名	年次	受賞組織名
1951	昭和電工株式会社	1966	関東自動車工業株式会社
	田辺製薬株式会社		松下電器産業株式会社部品事業本部（事業部賞）
	富士製鐵株式会社	1967	神鋼鋼線鋼索株式会社
	八幡製鐵株式会社		小島プレス工業株式会社（中小企業賞）
1952	旭化成工業株式会社	1968	ブリヂストンタイヤ株式会社
	塩野義製薬株式会社		ヤンマーディーゼル株式会社
	武田薬品工業株式会社		中国化薬株式会社（中小企業賞）
	東洋紡績株式会社		シンボ工業株式会社（中小企業賞）
	日本電気株式会社	1970	トヨタ車体株式会社
	古河電気工業株式会社		日野自動車工業株式会社
	表彰——九州クロス株式会社		
1953	川崎製鐵株式会社	1972	アイシン精機株式会社
	信越化学工業株式会社		埼玉鑄造工業株式会社（中小企業賞）
	住友金属工業株式会社	1973	三輪精機株式会社（中小企業賞）
	東京芝浦電気株式会社		埼玉機器株式会社（中小企業賞）
1954	東洋ベアリング製造株式会社		三菱重工業株式会社神戸造船所（事業所表彰）
	東洋レーヨン株式会社	1974	株式会社堀切バネ製作所（中小企業賞）
	日本曹達株式会社		株式会社協同測量社（中小企業賞）
1955	旭硝子株式会社	1975	株式会社リコー
	株式会社日立製作所		株式会社武部鉄工所（中小企業賞）
	本州製紙株式会社		東海化成工業株式会社（中小企業賞）
1956	小西六写真工業株式会社		理研鍛造株式会社（中小企業賞）
	株式会社東北工作所		積水化学工業株式会社東京工場（事業所表彰）
	富士写真フイルム株式会社	1976	株式会社三協精機製作所
	三菱電機株式会社		ぺんてる株式会社
1957	該当組織なし		小松造機株式会社（中小企業賞）
1958	鐘淵化学工業株式会社		石川島播磨重工業株式会社航空宇宙事業本部（事業部賞）
	呉羽化学工業株式会社		久保田鉄工株式会社内燃機器事業本部
	日本鋼管株式会社		内燃機器研究本部（事業所表彰）
	松下電子工業株式会社		久保田鉄工株式会社内燃機器事業本部
	株式会社中与通信機製作所（中小企業賞）		内燃機器製造本部堺製作所（事業所表彰）
1959	旭特殊硝子株式会社	1977	アイシン・ワーナー株式会社
	倉毛紡績株式会社		日本飛行機株式会社厚木製作所（事業所表彰）
1960	日産自動車株式会社	1978	株式会社東海理化電機製作所
	株式会社東和製作所（中小企業賞）		中越合金鑄工株式会社（中小企業賞）
1961	帝人株式会社	1979	株式会社竹中工務店
	日本電装株式会社		積水化学工業株式会社
	日本ラヂエーター株式会社（中小企業賞）		九州日本電気株式会社
1962	住友電気工業株式会社		東北リコー株式会社
1963	日本化薬株式会社		浜名湖電装株式会社（中小企業賞）
1964	株式会社小松製作所		株式会社日本製鋼所広島製作所（事業所表彰）
1965	トヨタ自動車工業株式会社		

資料・年表

年次	受賞組織名	年次	受賞組織名
1980	萱場工業株式会社 小松フォークリフト株式会社 高丘工業株式会社 富士ゼロックス株式会社 株式会社共和工業所（中小企業賞） 株式会社小林コーセー生産本部（事業所表彰）	1988	アイシン軽金属株式会社 アスモ株式会社 株式会社富士鉄工所 常磐興産株式会社常磐ハワイアンセンター（事業部賞） サントリー株式会社武蔵野ブルワリー（事業所表彰）
1981	アイホン株式会社（中小企業賞） 京三電機株式会社（中小企業賞） 東京重機工業株式会社工業用ミシン本部（事業部賞） 松下電工株式会社彦根工場（事業所表彰）	1989	アイシン新和株式会社 株式会社伊藤喜工作所 東陶機器株式会社 東北日本電気株式会社 前田建設工業株式会社 フロリダ電力株式会社（海外） 株式会社アーレスティ（中小企業賞） 豊興工業株式会社（中小企業賞） 株式会社神戸製鋼所長府北工場（事業所表彰） 前田製管株式会社本社工場（事業所表彰）
1982	鹿島建設株式会社 山形日本電気株式会社 横河・ヒューレット・パカード株式会社 リズム時計工業株式会社 アイシン化工株式会社（中小企業賞） 新和工業株式会社（中小企業賞）	1990	アイシン豊容株式会社 株式会社アマダワシノ 静岡日本電気株式会社 サントリー株式会社山梨ワイナリー（事業所表彰）
1983	清水建設株式会社 株式会社日本製鋼所 アイシン軽金属株式会社（中小企業賞） 富士電機製造株式会社松本工場（事業所表彰）	1991	関西日本電気株式会社 株式会社不二越 北辰工業株式会社 台湾フィリップス株式会社（海外） 辰栄工業株式会社（中小企業賞） 新潟凸版印刷株式会社（中小企業賞）
1984	関西電力株式会社 小松ゼノア株式会社 株式会社安川電機製作所 安城電機株式会社（中小企業賞） 北陸工業株式会社（中小企業賞）	1992	愛三工業株式会社 ジャトコ株式会社 凸版印刷株式会社エレクトロニクス事業本部 第二事業部熊本工場（事業所表彰） 日産自動車株式会社追浜工場（事業所表彰）
1985	豊田工機株式会社 豊田合成株式会社 日本カーボン株式会社 日本ゼオン株式会社 株式会社内野工務店（中小企業賞） コマニー株式会社（中小企業賞） 豊容精機株式会社（中小企業賞） 日本テキサス・インスツルメンツ株式会社 バイポーラ事業部（事業部賞）	1993	N T T データ通信株式会社
1986	株式会社豊田自動織機製作所 株式会社間組 株式会社三陽電機製作所（中小企業賞） 日東建設株式会社（中小企業賞）	1994	株式会社前田製作所 A T & T パワーシステムズ（海外） エイ・ダブリュ工業株式会社（中小企業賞） エヌティーテクノ株式会社（中小企業賞） 合資会社興立産業社（中小企業賞） ダイヤモンド電機株式会社（中小企業賞）
1987	アイシン化工株式会社 愛知製鋼株式会社 株式会社ダイヘン 日本電気アイシーマイコンシステム株式会社	1995	石川島播磨重工業株式会社原子力事業部 エムテックスマツムラ株式会社 菊池プレス工業株式会社 東陽精機株式会社 日産自動車株式会社村山工場（事業所表彰）

年次	受賞組織名	年次	受賞組織名
1996	アイシン辰栄株式会社 安藤電気株式会社 コニカ株式会社日野生産事業部 日本電気無線電子株式会社 富士写真光機株式会社 日産自動車株式会社栃木工場（事業所表彰）	2004	CCCポリオレフィン株式会社（海外） インドガルフ・ファーティライザーズ株式会社（海外） ルーカスTVS株式会社（海外） サイアムミツイPTA株式会社（海外） SRF株式会社 合成工業製品事業部（海外） タイセラミック株式会社（海外）
1997	アイシン機工株式会社 小島プレス工業株式会社 東洋ガラス株式会社	2005	豊生ブレーキ工業株式会社 クリシュナ・マルチ株式会社 シート事業部（海外） ラネ・エンジンバルブズ株式会社（海外） ラネ・TRWステアリングシステムズ株式会社 ステアリングギア事業部（海外）
1998	アイシン・エイ・ダブリュ精密株式会社 安藤電気技術サービス株式会社 伊藤喜オールスチール株式会社 沖縄石油精製株式会社 サンデン株式会社 フジミ工研株式会社 スندگان・クレイトン株式会社ブレーキ事業部（海外）	2006	株式会社西澤電機計器製作所 サンデン・インターナショナル（シンガポール）株式会社（海外） サンデン・インターナショナル（USA）株式会社（海外）
1999	株式会社ミヤマ工業	2007	旭インディア硝子株式会社自動車ガラス事業部（海外） ラネ（マドラス）株式会社（海外） リライアンス・インダストリーズ株式会社 ハジラ事業所（海外）（事業所表彰）
2000	金秀アルミ工業株式会社 サンデン物流株式会社 サンワテック株式会社 株式会社ジーシー	2008	タタ・スチール株式会社（海外）
2001	サンデンシステムエンジニアリング株式会社 スندگان・ブレーキ・ライニングス株式会社（海外） タイ・アクリリック・ファイバー株式会社（海外） タイ・カーボン・ブラック株式会社（海外）	2009	新潟ダイヤモンド電子株式会社 ザ・サイアム・ホワイ・セメント株式会社（海外）
2002	ザ・サイアム・セメント株式会社（テウングソング）（海外） TVSモーター株式会社（海外） ハイ・テクカーボンGMPD（海外）（事業所表彰）	2010	株式会社コロナ 製造本部 株式会社メイドー 而至歯科（蘇州）有限公司（海外） ナショナル・エンジニアリング・インダストリーズ株式会社（海外）
2003	株式会社ジーシーデンタルプロダクツ ブレイクス・インディア株式会社 鋳造事業部（海外） マヒンドラ アンド マヒンドラ株式会社 農業機械事業部（海外） ラネ・ブレーキ・ライニングス株式会社（海外） ザ・サイアム・リフラクトリー・インダストリー株式会社（海外） ソナコーヨー・ステアリング・システム株式会社（海外） タイペーパー株式会社（海外） グラシム・インダストリーズ株式会社 ビルラ・セルローシク事業所（海外）（事業所表彰）	実施賞 延220組織（実施賞国内125組織、海外32組織、中小企業賞38組織、事業部賞5社5事業部、事業所表彰国内13社17事業所、海外3社3事業所） 備考：組織名は受賞当時のものを掲げてあります 1995年度から実施賞中小企業賞および実施賞事業部賞という名称は廃止され、実施賞に一本化されました 2010年度から事業所表彰は実施賞に一本化されました	

日本品質管理賞について

日本品質管理賞は、1969年10月に東京で開催された世界初の品質管理国際会議（ICQC'69 Tokyo）を記念して、この会議開催の意義を永く将来にわたって維持し、より高めるとともに、品質管理の一層の発展を図ることを目的として、同会議の剰余金を基金として創設されたものであります。

日本品質管理賞は、デミング賞実施賞を受賞し、さらに受賞後3年以上にわたり継続的に「TQM」を実践している組織が応募することができ、「TQM」の特色が活かされ、その水準が向上・発展していると認められた場合に授与されます。さらに日本品質管理賞を受賞した組織は、受賞してから3年以上経過すれば、その応募を繰り返すことができます。このように品質管理を長期にわたって実践してきた組織にとって、本賞を受賞することは最高の荣誉であります。

日本品質管理賞受賞組織一覧

（組織名五十音順）

年次	受賞組織名
1970	トヨタ自動車工業株式会社
1973	日本電気株式会社
1975	新日本製鐵株式会社
1977	アイシン精機株式会社
1980	トヨタ車体株式会社
1981	株式会社小松製作所
1982	アイシン・ワナー株式会社
1985	高丘工業株式会社
1990	アイシン精機株式会社
1991	アイシン・エイ・ダブリュ株式会社
1992	アイシン化工株式会社 株式会社竹中工務店
1994	アイシン軽金属株式会社
1995	前田建設工業株式会社
1997	台湾フィリップス株式会社（海外）
2002	サンデン株式会社 スندگان・クレイトン株式会社 ブレーキ事業部（海外）
2004	株式会社ジーシー
2005	タイ・アクリリック・ファイバー株式会社（海外）
2006	株式会社ジーシーデンタルプロダクツ
2007	マヒンドラ アンド マヒンドラ株式会社 農業機械事業部（海外）

日本品質管理賞 延21組織

備考：組織名は受賞当時のものを掲げました。

特集 『品質管理の始め（ルーツを探る）』

デミング博士の来日とデミング賞 創設の歴史[†]

三田 征史*



The Deming Prize was established in 1951, and has contributed largely to the dissemination and development of the Quality Management in Japanese industries for 58 years, having approximately 200 companies mainly from manufacturing industries challenged and awarded the Prize. As its history and current situation are widely introduced by a numbers of Medias such as books and newspapers, I would like to introduce the background of the Deming Prize foundation from the standpoint of the Secretary who has been associated and involved in the Deming Prize relations for a long time. Upon introducing, I would first, like to touch upon the Union of Japanese Scientists and Engineers (JUSE) as the Secretariat body, situation of Japanese economy and Quality Control after World War II, and Dr. W. E. Deming's visit to Japan. In closing, I will try to sum up this article by presenting the progress and development of the Deming prize as well as my hope about the prize toward for the future.

1. はじめに

デミング賞は、1951年に創設され今年までの60年間で、主として日本のモノづくり企業約220社が受賞し、わが国産業界における品質管理の普及・発展に大きな貢献を果たしてきた。これらの歴史や状況は言うまでもなくこれまで数多くの書籍や新聞、マスコミなどでも取り上げられ、広く紹介されている。そこで、本稿では、私が日科技連でデミング賞の事業に長く携わってきた立場・視点から、デミング賞についてその創設のいきさつを紹介する。

2. 日本科学技術連盟の設立と当時の状況

デミング賞の創設をご紹介する前に、やはりその母体となった(財)日本科学技術連盟（以下、日科技連）について紹介する。1945年8月に広島、長崎に原子爆弾が投下され、日本の敗戦は決定的なものとなった。同月終戦を迎え、荒廃、混迷する日本では、明日への希望を見失った時代であった。

このような時代に資源もエネルギーも持たない日本の発展は、科学技術の振興、工業立国への途しかないと考

えていた科学者、技術者のいくつかの団体が戦時中からあった。その中の(社)工政会、(社)日本工人倶楽部、(社)全日本科学技術統同会の3つの団体が大同団結し、1944年に大日本技術会が誕生した。戦後も大日本技術会は存続を目指したが、終戦の混乱の中、計画した事業が思うように進まず、1946年4月に解散となった。そして、あらたにわが国の科学技術運動の伝統を育成し、工業の発展に寄与することを目的として、同年5月に大日本技術会の財団関係寄付行為を継承し、日科技連が創立された。

創立された日科技連の初代会長に石川一郎氏（旧経済団体連合会（現、日本経済団体連合会）初代会長）、理事長に巽良知氏、専務理事兼事務局長に小柳賢一の各氏が選任された。創設後は、主に3つの事業に重点を置いて活動を開始した。

第一に、広く産・学・官にかかわる科学技術者のネットワークづくり。これは、「エンジニア・クラブ」を設置して、技術者の親睦と連絡のための場を提供した。第二に、様々な活動や成果を紹介し、広く産業界に啓蒙するための機関紙や専門誌を発行した。そして、第三には、海外技術の調査・研究であった。

この海外技術に関する調査・研究を通してアメリカにおいて統計的な方法を用いた品質管理が、工業の発展に大きな成功をもたらしていることがわかり、日本の産業界にも品質管理を普及させることがこれからの日本の復興・発展には重要であると認識した。

このような状況に対応して、日科技連では統計的方法の工業と技術への応用を研究するために「統計的品質管

[†]平成21年9月28日受付

* (財)日本科学技術連盟 専務理事・事務局長デミング賞委員会セクレタリー
連絡先：〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-10-11 (勤務先)



SQC リサーチグループのメンバー

理調査委員会」を1948年11月に発足させた。

そして、この委員会が母体となり産、学、官の有志のメンバーで構成した“SQC リサーチグループ”（通称：QCリサーチグループ／増山元三郎、西堀榮三郎、水野滋、朝香鐵一、茅野健、河田龍夫、三浦新、石川馨らの各氏・順不同）が誕生し、統計的品質管理の研究と日本の産業界への普及・啓蒙・教育を本格的にスタートさせた。このときに誕生したのが、現在も開催を継続している統計的品質管理を体系的に学ぶための「品質管理セミナーベーシックコース」（通称：BC）である。

3. 敗戦後の日本経済と品質管理

敗戦後のわが国の経済は疲弊し、ほとんど麻痺的な状態であった。戦争により破壊・焼失した建物、戦争を優先した政策により、設備関係は更新や補修はされずに老朽化し、破壊から免れた良質な工業設備は、賠償として指定され、生産活動に使うこともできなかった。また、もともと天然資源の乏しいわが国では、原燃料や食料は輸入に頼らざるを得ず、生活物資は著しく不足していた。しかし、日本が戦後の復興を果たすためには国内の需要を満たし、国内で作った製品を世界中に輸出して、外貨を稼ぐことが必要であった。獲得した外貨によって、復興・成長に不可欠な原料や燃料が輸入できるようになるからである。しかし、当時の日本製品、“メイド・イン・ジャパン”は、“安かろう・悪かろう”の代名詞といわれ、国際競争力を持った工業製品を作る能力はなかった。

当時のエピソードとして、日本に進駐したGHQは、日本での通信事情の悪さから通信設備の復旧を急がせたが、国内メーカーが製造した部品や装置の品質が悪く復

旧が遅れ、問題となっていた。

1945年に創立した日本規格協会、1946年に創立した日科技連の両団体では、丁度同じ年に品質管理に関する教育を始めたところであった。また、GHQの一部門であったCCS（民間通信局）では、日本人に対して経営者講座を開き、CCSの局員が日本の電話機、通信機、真空管を製造している企業のトップに講座の一部で統計的品質管理を教えていた。

このように戦後、わが国の産業界に品質管理が普及し始めた頃、1950年6月に朝鮮戦争が勃発し、日本に戦争特需をもたらした。この特需により不況下で低迷していた日本経済は息を吹き返し、戦後の復興を成し遂げ、高度成長の第一歩を踏み出した。また、1949年には工業標準化法が施行され、JIS（日本工業規格）が生まれた。JISは、品質管理とともにわが国の製品品質の向上に大きな役割を果たすことになった。

終戦後わずか4年～5年、私どもの先達は、強い使命感と熱い情熱を持って日本の復興のために並々ならぬ努力をされたことに感謝の念を持ち心から敬意を払わなければならない。

4. デミング博士、来日のいきさつ

デミング博士は、日科技連が1950年6月に招聘する前の1947年1月にすでに来日されていた。このあたりの状況については、日科技連『創立五十年史』の中で、森口繁一先生（当時、東京大学助教授）が記述されているので紹介したい。

敗戦直後、GHQは日本の官庁統計の不備を指摘、その建直しに米国から統計使節団の派遣を要請しました（1946～1948）。その使節団の一員としてデミング博士は来日されました。

そして、森口繁一先生は次のように話された。「デミング博士が1947年来日の際、山内二郎先生（当時、東京大学教授）が統計学を通じて博士と親交を結ばれ、博士が数冊の著書を贈呈されました。山内先生が私にその内の1冊を翻訳してみないかと奨められ、その翻訳の仕事がきっかけで博士と私の文通が始まりました。その文通の中で、1950年に博士が来日されるとの情報を得たのです。」

森口繁一先生は、この情報を日科技連のある会合の席で披露された。日科技連は、前述したとおり1948年から産業界に統計的品質管理を普及するための教育を行ってきたが、さらなる普及のためには統計的品質管理の専門家の教えが必要と考えていた。そこで小柳専務理事は、

すぐに「是非日科技連に招聘して講習会を開催したい」という希望を手紙に書いて博士に送ったのであった。

5. 小柳専務理事からデミング博士への来日要請

日科技連『創立五十年史』に、小柳専務理事がデミング博士の来日を要請した手紙文が掲載されているので、ここではその内容をそのまま紹介する。

<Deming 博士の来日要請>

「1949年（昭和24年）12月に東京大学の森口繁一助教授がデミング先生から1950年の春、日本へ来る機会があるという手紙を受けたとお話しされました。私共は1948年以来統計的品質管理の研究を続け、当時日本の有力工業会社17社から38氏の技術者が参加して、1か年に30日間のゼミナールを実施中でありました。たまたま、かねて計画しておりました月刊『品質管理』誌の創刊号が、いよいよ3月下旬に世に出るところまで進捗いたしましたので、3月8日かねて尊敬する先生に創刊号へのメッセージをいただくようお願いすると共に、来日の計画の可否とその確実な時期問い合わせの手紙を差し出したのであります。3月22日付をもって先生は今夏来日の予定であること、雑誌にはいかなる論文を希望するかということ及び米国の品質管理界の有名な研究者13氏（略）を紹介くださいました。親切なお手紙に感謝しました私は、当連盟の会長はじめ品質管理の研究普及事業に協力下さっている諸先生方の賛成を頂いてデミング先生に書いて頂きたい論文の首題内容に対する希望と同時に、来日されたら、日本の工業界のために統計的品質管理について数日間の講習会を与えて頂きたいとの懇請の手紙（4月1日付）を差し出したのであります。」（小柳賢一）

この小柳専務理事からの来日の要請により、デミング博士は来日されることとなった。

博士は、1950年6月から約2か月間滞在された。その間、日科技連では博士による“品質の統計的管理”8日間コース、さらに経営者、管理者のための品質管理講習会などを東京と大阪で積極的に開催した。品質管理の重要性についてのデミング博士の懇切丁寧な講義と指導は、参加者に深い感銘を与えた。

博士の講義の解説、補講には前述のQCリサーチグループがあたり、後の日本の品質管理の発展に大きな足跡を残された。この辺の詳しい事情については、誌面の都合で省略するが、是非日科技連の『創立五十年史』を読んでいただきたい。



デミング博士と小柳専務理事

6. デミング賞創設のいきさつ（状況）

日科技連では、博士の講義内容を完全な記録として残すことが大切であると考え、講習会期間を通して英語と日本語の速記者を配し、下記の各氏の協力もいただき記録班（記録担当：今泉益正、草場郁郎、藤田董、各氏はか数名）を編成した。

博士は日科技連の意図に賛同され、講義の内容を印刷物にすることを快諾された。

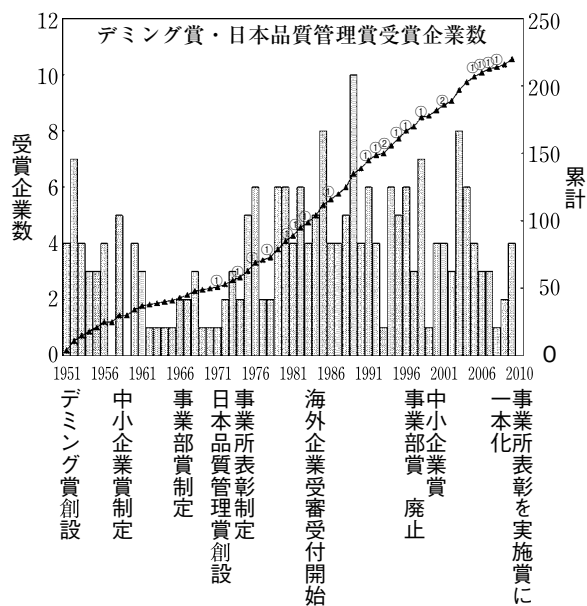
この講義録は、“Dr. W. E. Deming’s Lectures on Statistical Control of Quality”（和文名「デミング博士品質管理講義録」）として、発行し、会員に配付した他1部400円で一般にも頒布した。

そして、博士は、この講義録の配付で得た印税の一部を日科技連の小柳専務理事に寄贈された。小柳専務理事は感激し、日科技連の役員会に図り、デミング博士の多大な業績と友情を記念して、日科技連理事会の決議により1951年にデミング賞を創設した。このようにしてデミング賞の制度が誕生し、これを運営するために設けられたのがデミング賞委員会である。

デミング賞委員会の運営事務は日科技連事務局が統括し、必要な費用は、日科技連の支出によって賄われている。

デミング博士来日以来、今年61年目を迎え、デミング賞創設60年目となった。創設以来多くの皆様のご協力と多くの企業の推進により品質管理に関する世界最高ランクの賞として、日本のみならず、世界の品質管理の発展に大きく寄与してきた。

資料・年表



1951年～2010年のデミング賞受賞組織延べ220組織および日本品質管理賞受賞企業21組織の累計推移。
○印の数字は日本品質管理賞受賞組織数を示す。

デミング賞受賞会社の推移

表し、次にデミング賞に挑戦する企業とその事例をベンチマークして、さらに自社の取り組みをレベルアップして受賞するという一つの流れがあったからである。新たにデミング賞に挑戦する企業・組織は、先輩受賞企業から学び、さらに自社独自の品質管理を構築した。なお、2010年からはデミング賞事業所表彰が廃止され、実施賞に一本化されることになった。これに伴い、実施賞の応募資格を柔軟化し、より多くの組織にデミング賞に挑戦いただけるようになる。デミング賞実施賞は、「デミング賞実施賞を受賞できる企業とは」ということで、以下の3項目を掲げている。

- a) 経営理念、業種、業態、規模および経営環境に明確な経営の意思をもとに、積極的な顧客指向の経営目標・戦略が策定されていること
- b) a)の経営目標・戦略の実現に向けてTQMが適切に実施されていること
- c) b)の結果として、a)の経営目標・戦略について効果をあげていること

7. デミング賞のあゆみと発展

デミング賞委員会の委員長は、デミング賞委員会規定に基づき、日科技連会長が就任することとなり、初代委員長には、当時日科技連会長で旧経済団体連合会（現、日本経済団体連合会）初代会長の石川一郎氏が就任した。この後、デミング賞委員会委員長は、日科技連会長または日科技連理事会の推薦する者が就任することとなっている。

創設以来デミング賞は、その時代の要請に応じて、随時賞の設定、創設、改定を行ってきた。

1957年、デミング賞実施賞に中小企業賞を制定した。1965年にデミング賞実施賞に事業部賞を制定、1969年には、東京で開催された世界初の品質管理国際会議を記念して、日本品質管理賞（デ賞受賞後3年以上経過）を創設した。1972年にはデミング賞事業所表彰を制定。また、1984年には外国企業の応募を認め、1989年、外国企業として初めて米国フロリダ電力が実施賞を受賞している。そして、個人に贈られるデミング賞本賞は2010年までに73名が受賞され、日本の品質管理の牽引役として、リーダーシップを発揮され、それぞれの分野で活躍されている。

この賞が普及した背景には、デミング賞を受賞した企業が受賞した内容を報告書や講演会などで広く社会に公

8. おわりに

2010年は、1951年のデミング賞創設以来60年目となった。戦後60年以上を経て今の近代化した東京の姿を見て、以前ここが焼け野原だったとは誰も想像がつかないのではないだろうか。

この60年を経て、日本は目覚ましい復興を果たし、敗戦から立ち直り、経済大国日本、また品質立国日本といわれるまで素晴らしい成長を遂げた。

一昨年のリーマンショックによる経済危機から2年、わが国の産業界は大打撃を被ってしまったが、先達の復興にかける熱い情熱に思いを馳せると、必ずや日本はこの試練を乗り越え、次の成長のステップを踏んでいくと信じている。そのためにも、わが国の製造業、ものづくりの力をさらに高め、合わせて品質も信頼性も、そして安全性も進化させていかなければ、グローバルな競争では生き残ることは難しいと思われる。

そのための力は、必ずや私たちの中に秘められているように感じている。日科技連として先達の熱い思いを胸にこれからも産業界に寄与する様々な事業に取り組んでいかなければならないと心を新たにしているところである。

デミング賞が創設70年、80年いや100年という記念となり、より産業界に貢献できることを夢見て。

編集後記

1951年に創設されたデミング賞が60年を迎えたのを機に「デミング賞創設60年記念史」の編纂を行いました。あらためて60年という歴史の長さや重さを感じました。

創設時の日本の状況を思う時、今日まで継続してこられたのは、情熱を傾注された多くの先人達のご努力、そして数えきれない企業関係の皆様の品質向上と人材育成に取り組まれた成果と実績にほかならないと思います。これらの方々に衷心より敬意を表します。

創設60年ということは、先の大戦後の荒廃から立ち直って、今日の経済大国に成長した我が国のあゆみと軌を一にしています。

偉大な先人達と企業の方々の志と努力とその偉業を顧みたま時、60年を経て、我々は今何をすべきか、次世代に何を継承し、残すべきか、創設時の原点に立ちかえって、更なる進化、発展を期さねばなりません。60年の歴史を振り返り、60年を契機として、世界最高ランクの品質賞として継続、発展するために新たな努力をしていきたいと思っています。

60年史にご寄稿いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。そして、編纂に携わっていただいた小大塚理事と密係長、国際室の高取課長と浜井さんに感謝いたします。

2010年11月1日

デミング賞委員会セクレタリー 三田 征史
財団法人日本科学技術連盟 専務理事・事務局長

デミング賞創設60年記念

デミング賞の60年 (非売品)

2010年11月10日 発行

発行 デミング賞委員会・財団法人 日本科学技術連盟©

〒161-0031 東京都杉並区高円寺南1-2-1
電話 (03) 5378-1212

The Deming Prize Committee

©2010 UNION OF JAPANESE SCIENTIST AND ENGINEERS (JUSE) 金精社 10111000

The background of the entire page is a marbled paper pattern. It features a complex, organic design with swirling, vein-like patterns in various shades of blue, teal, and purple. The colors are distributed unevenly, creating a rich, textured appearance. The overall tone is cool and sophisticated.

2010